

飛鳥藤原地域出土の 木製食器

はじめに 古代における木製容器は、製作技法によって、^{くりもの} 刳物・^{ひきもの} 挽物・指物・曲物に大別できる。挽物は、初現が弥生時代に遡るとい説もあるが、^{ろくろ} 轆轤にかけて回転成形した挽物が刳物よりも主流となるのは、8世紀以降のこととされる（奈文研1993、上原1996、須藤2009）。

当研究所による飛鳥藤原地域の発掘調査で出土した7世紀代の挽物容器は、現在までに7点の食器を確認しているのみで、研究対象資料として取り上げられる機会が少なかった。本稿では、これらの挽物食器について取り上げ、「かたち」と時期を中心に考えてみたい。食器類の形態は概ね土器器種と一致しており、土器の呼称に準じる（奈文研1985）。

飛鳥藤原地域出土の木製食器（図97） 1は挽物漆器碗の口縁部片で、口径は15.9cmに復原できる。内外面ともに黒漆が塗られている。銅鏡の形状に類似する。藤原宮西方官衙地区の廃棄土坑SK1245から7世紀後半の土器群と共に出土した。2は白木挽物皿Bの底部片である。高台径は23.4cm、口径は29.2cmに復原できる。縦木取りで、樹種はケヤキ。坂田寺SG100から飛鳥Ⅱの土器群と共に出土した。3は挽物漆器杯Bで、口径15.4cm、器高6.3cmである。断面三角形の輪高台が削り出され、底部外面中央には轆轤爪跡が残る。外面全体から口縁部内面上端部にかけて黒漆が塗られている。須恵器杯Bと器

形が類似する。横木取りで、樹種はケヤキ。4は挽物漆器碗または杯の口縁部の破片で、小破片のため口径は不明である。内外面全体に黒漆が施される。3よりも器壁が厚く大振りであるが、形状は類似している。横木取りで、樹種はケヤキ。3・4ともに石神遺跡の道路側溝SD1347から飛鳥Ⅴの土器群と出土した。5は挽物漆器蓋で、復原口径20.5cm、残存高1.85cmである。口縁部はかえりが削り出され、頂部外面には轆轤目がよく観察できる。内外面全体に黒漆が施される。遺構にともなわなないが、古代の所産と考えられる。6（図98）は白木挽物盤Bで、復原口径56.8cm、器高7.1cmの大型製品で、調理具の可能性もある。断面が丸みのある四角形状をした輪高台が削り出されている。器表面は、轆轤目が目立たず、全体的に平滑な仕上がりとなっている。横木取りで、樹種はケヤキ。藤原京左京七条二坊SD310Aより出土した。SD310Aは7世紀前半に埋没したと報告されている



図98 挽物盤B

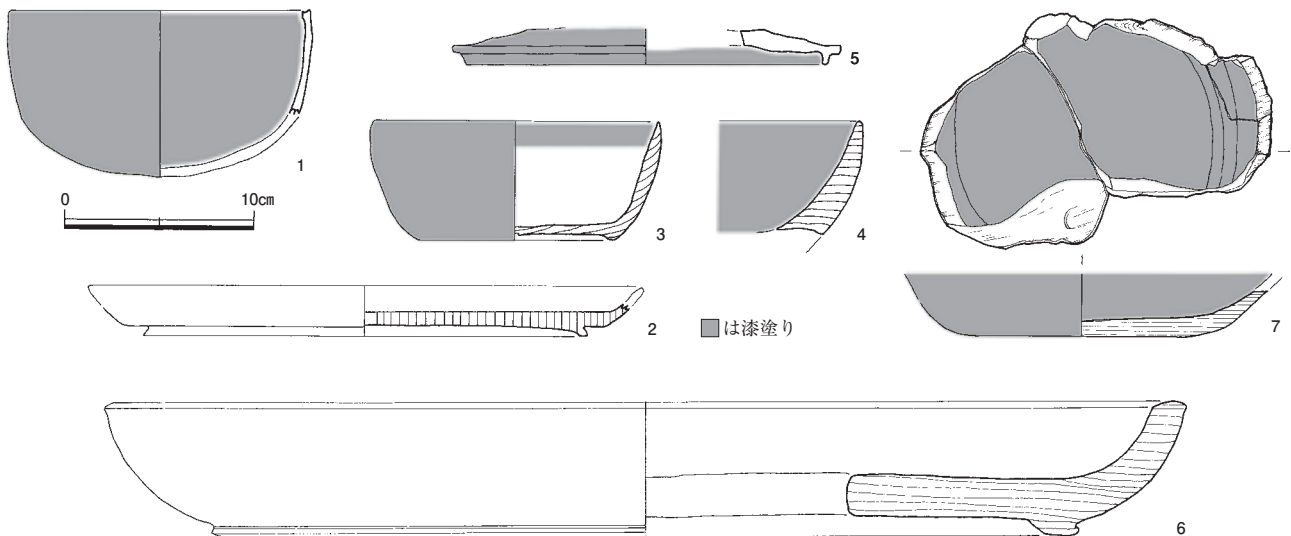


図97 飛鳥藤原地域出土の木製食器 1：4

表12 飛鳥藤原地域出土木製食器

No.	器種	出土遺構・層位	年代	樹種	報告書
1	挽物漆器椀	藤原宮SK1245	7世紀後半	—	藤原報告Ⅱ
2	挽物皿B	坂田寺SG100	飛鳥Ⅱ	ケヤキ	藤原概報 3、木器集成図録 古代篇
3	挽物漆器杯B	石神遺跡SD1347	飛鳥Ⅴ	ケヤキ	紀要 2004
4	挽物漆器椀・杯	石神遺跡SD1347	飛鳥Ⅴ	ケヤキ	紀要 2003
5	挽物漆器蓋	石神遺跡	飛鳥Ⅴ	—	紀要 2003
6	挽物盤B	藤原京左京七条一・二坊SD310A	飛鳥Ⅰ～	ケヤキ	藤原概報 25
7	挽物漆器杯A	藤原宮北面外濠SD145	7世紀末～8世紀前半	サクラ属	藤原概報 14

（『藤原概報 25』）。7は挽物漆器杯Aと考えられる底部片で、底部径は14.0cmに復原できる。内外面には黒漆が施されるが、外面は器表面が荒れており漆はほとんど剥離している。横木取りで、樹種はサクラ属。藤原宮北面外濠SD145から7世紀末～8世紀前半の土器群と共に出土した。

これら挽物食器の樹種に関して、近現代においては広葉樹材が主に用いられる。中でもケヤキは堅硬で靱性もあるため、薄手物に適しており、なおかつ漆との相性もよいといわれる。平城京における8世紀代の挽物皿には、トチノキやケヤキなどの広葉樹の他、ヒノキも多用している（奈文研1985）。本稿で扱った資料は、量的には少ないながら、ケヤキを多用している。

木器と土器のかたちと時期 次に、挽物皿Bの「かたち」に注目してみたい。これまでの研究で、8世紀～9世紀の食器形態の挽物漆器は、金属器や土器の形態に類似すると指摘されている（金子1995）。7世紀～8世紀に位置づけられている挽物皿Bと土師器皿Bを取り上げ「かたち」の比較をおこなった（図99）。

挽物皿Bに関しては、7世紀後半～8世紀末にかけて、高台の位置が口縁部下半と底部の境目より内側にあるものが、境目付近に近づいていく。また、口縁部の立ち上がりが垂直に近いものから、外傾していき、外側に開くような形状へと変化していく。

土器に関しても、高台の位置は内側から外側へと移り、口縁部が外側へ開くような形状へと変化するなど、木器と同様の型式変化がみられる。7世紀代においても、挽物の形態と土器の形態に相関性が認められるといえよう。

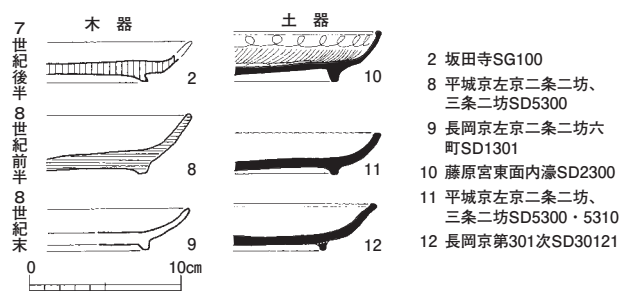


図99 木器と土器の皿B 1:5

では、木器や土器の皿Bはいつごろ生産され始めるのだろうか。土器に関しては、古墳時代は丸底の器が主流であり、大型で底部が平らな器は存在しない。皿Bが土師器や須恵器で多くみられるようになるのは、飛鳥Ⅳ・Ⅴ以降と考えられる。

木器に関しては、2は飛鳥Ⅱの土器群と共伴しており、挽物皿Bの初出と評価できる。しかしながら、挽物皿Bの数量が増加するのは飛鳥Ⅳ・Ⅴ以降と考えられる。おわりに 平城京と比べると、飛鳥藤原地域における挽物は、出土例がまだまだ少ないものの、7世紀に位置づけられる挽物食器は確実に存在している。このことから、8世紀以降に盛んとなる挽物生産の萌芽が、7世紀代にみられると評価してよいだろう。7世紀～8世紀代の日本における挽物生産の受容と発展過程をあきらかにするには、中国や朝鮮半島における挽物生産とその技術の波及を復原し、日本における挽物生産と比較検討していく必要があろう。

木器は性質上、土器よりも遺存しにくいのが難点であるが、今後、飛鳥藤原地域における7世紀代の出土木製食器が増えることを期待したい。（木村理恵）

※樹種の調査は、年代学研究室客員研究員藤井裕之に、プレバートを作製し、生物顕微鏡で観察する方法で実施していただいた。図面トレースは長田美知代にご協力いただいた。

参考文献

- 飯塚武司「古代の木工挽物」『東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅳ』2000。
- 上原真人「木製容器の種類と画期」『古代の木製食器—弥生期から平安期にかけての木製食器—』埋蔵文化財研究会、1996。
- 金子裕之「8・9世紀の漆器—身分表示の食器—」『文化財論叢Ⅱ』同朋社、1995。
- 須藤護「古代の轆轤工と渡来人」『国際社会文化研究所紀要11』龍谷大学国際社会文化研究所、2009。
- 奈良国立文化財研究所『藤原概報 9』1979。
- 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代篇』1985。
- 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始篇』1993。
- 奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査—』1995。
- 向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第43集、1996。